

〔神皇正統記高倉〕清盛權を專にせし事は、殊更にこの御代の事なり、其女徳子入内して女御とす、即ち立后有りき、末つかたやうく處々に反亂の聞え有りき、清盛一家非分の業、天意に背きけるにこそ、嫡子内大臣重盛は心ばへ賢くて、父の悪行なども諫めとめけるさへ世を早くしぬ、彌驕をきはめ權をほしきまゝにす、時の執柄にて、菩提院の關白基房の大臣おはせしも、中らひよろしからぬ事ありて、太宰の權帥にうつして配流せらる、妙音院の師長の大臣も京中を出ださる、その外に罪せらるゝ人多かりき、略中清盛彌惡行をのみなしければ、主上深く歎かせ給ふ、俄に遜位の事ありしも、世を厭はせましくける故とぞ、

〔平家物語〕清水えん玄やうの事

仁安三年三月廿日の日、新帝高倉高大高倉殿にして御そくぬあり、此君のくらむにつかせ給ひぬるは、いよく平家の榮花とぞみえし、國母建春門院滋子と申は、入道相國清盛の北のかた、八條の二位殿の御いもうと也、又平大納言時忠の卿と申も、此女院の御兄なるうへ、内の御外せきなり、内外につけて玄つけんの臣とぞみえし、其比の玄よむちもくと申も、偏に此時忠の卿のまゝなりけり、やうきひがさいはひし時、やうこくちうがさかえしとぞし、世の覺え時のきらめでたかりき、入道相國天下の大小事をの給ひあはせられければ、時の人平くわんばくとぞ申ける、

〔平家物語〕玄の谷の事

嘉應も三年に成にけり、正月五日の日、主上高倉御げんぶく有て、略中入道相國清盛の御むすめ、子徳女御に參らせ給ふ、御とし十五さい、法皇白河御猶子のぎなり、妙音院殿師長、其比はいまだ内大臣の左大將にてましくけるが、大將を玄し申させ給ふ事有けり、ときに徳大寺の大納言玄つていひの卿、其仁にあひあたり給ふ、又花山の院の中納言兼まきの卿も所も有、その外故中のみかどの藤中納言家成の卿の三男、新大納言なりちかの卿もひらに申さる、略中其比の叙